

日本の機械工具を世界一にした男・井村荒喜

井村 啓造

日本の機械工具を世界一に押し上げた井村荒喜は、不二越の創業者で明治二十二年十一月三日に島原・北有馬今福で生まれた。荒喜の父・庄太郎は庄屋の長男で、母・きくは島原藩御用商人・吉岡元吉の娘であり、利発で体格も良く神仏を敬い、またしつけに厳しい女であった。

荒喜は先年長崎新聞に連載された医師・末永敏事とは幼なじみで、少年期と多感な青年期の十二年を長崎で過ごした。その間荒喜は親戚の医師・末永道伯の下で論語や十八史略、日本外史などを勉強し、高等小学校に進むと道伯と小学校校長の勧めで中学校の講義録を取り寄せて英語の学習も始め、書道も三体千字文を手本に学んでいる。小学校を卒業し十三歳で医師を目指して長崎へ進学し、医師の予備校・行余学舎に通ったが、家運が傾いたので北有馬に戻り役場に勤めた。そして再び長崎に来たのは十七歳の時で、荒喜の兄・貞市の家に身を寄せて米穀商を手伝い勉強を続け東山学院三年生に入学したが、彼の独学で身に付けた



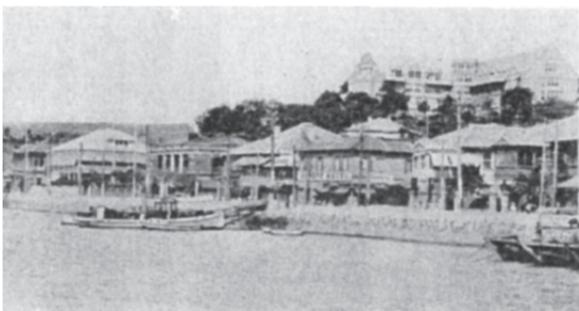
台湾・帝国製糖につとめていた頃
大正7年(1918) 28歳

英語力では不足だったので、鎮西学院の聴講生となり更に英語の勉強を続けた。井村家で唯一の頼りであった伯父・吉岡直平次(石炭の積み荷を扱う商人)の紹

介で、居留地にある芦沢商会で働くようになった。当時新開地であった大浦バンドの一等地にある芦沢商会は家具・寝具等の製造販売で多忙を極めており、この居留地と隣接の新地界隈を開歩する青年期の荒喜は、全身に新たなものを吸収していった。

荒喜が米の配達をしていた時、居留地英字新聞「ナガサキプレス」の主筆・二宮義親に見込まれ、上海に遊学し世界の活況を目の当たりにしている。ナガサキプレスの社主はグラバーの長男・倉場富三郎である。荒喜は新聞の発行に興味を持ち、熱心に新聞社に通う内に社内で評判となり「九州日の出新聞」の記者見習いとして採用された。

彼は新聞社のある銀屋町へ居を構え、同社の記者・斎藤徹が荒喜に弁護士になる事を勧めた。(斎藤はのちに衆議院議員として活躍)荒喜は大出の仲間に對し自分の力を試したいという負けず嫌いから、弁護士への一次試験は合格したが弁護士への道も新聞記者への道も進まなかった。記者見習いをするうちに他社からも注目されたが、なかでも後の長崎日日新聞社社長となる牧山耕蔵からは荒喜の実直さと研究熱心さを見込まれ、耕蔵の実弟がいる台湾の帝国製糖の仕事を紹介してもらった。大正四年、荒喜が二十六歳の時であった。



大浦バンド附近

台湾での仕事は製糖輸送鉄道敷設の責任者だった。荒喜は鉄道敷設事業の困難を乗り越え成し遂げた。そしてこの台湾事業を通して北島長兵衛と知り合った。北島は富山市出身で東京高商を卒業した後、商社マンとして富山に初めて自動車を持ってきた新進気鋭の事業家であった。その縁もあって荒喜は富山の電力事業所へ抜擢された。これが荒喜の不二越創業への第一歩である。

この大きな第一歩から事業を拡大していく中で、荒喜は生涯を通して吉田茂、近衛秀麿、福沢桃介、佐藤栄作、枋錦、緒方竹虎、今里広記、清島省三など多くの人々と関わりを持ち繋がっていった。これも少年期の恩師・末永道伯が授けた「一心以可交万友 一心以不可交一友」が基だろう。荒喜の魅力は人付き合いの広さと、人目を惹く体格の大きさであった。六尺を越す身長は明治の男としては珍しかった。そして天皇に大きな畏敬を抱いていた。

私が中学生の時、諏訪公園の丸馬場で泥だらけになって荒喜じいさんと相撲をとった。荒喜じいさんは股引一つだった。汗を拭きながら長崎の港を見て「北有馬から長崎に来た時、諏訪神社へ参拝し、この丸馬場から長崎の町を見たぞ。長崎は田舎者の自分には何もかも新しくかった。」と懐かしい島原弁で話してくれた。

終戦から十年、平和と復興を願って立山千本桜を私の父・学と私が植樹を達成した時「富山の霊峰・立山と同名の千本桜に感激した。個人だけでこれだけの大事業は出来るものではない。」と私を労い、「近い将来この千本桜は長崎の新しい桜の名所になるだろう」と言った。以来、人々が集う立山千本桜は長崎一の桜の名所となっている。私はこの桜を受け継ぎ、「東日本大震災復興祈願の福島桜と、荒喜が眠る富山の山桜」を先年植樹し、これからも井村荒喜、井村学の両先学に満開の桜を手向けたい。

(立山一丁目自治会長)

風信

○三月三日「桃の節句」と言い「桃カステラ」をいただいた。戦前の長崎地方の「桃の節句」は旧暦に因んで四月三日が「桃の節句」で此の日より「風あげ」が始まった。「長崎のぶらぶら節」にも次のようにうたっている。
ハタあげするなら 金比羅かさがしら 帰りは一杯気げんで瓢箪ぶうらぶら ぶらり ぶらりと言うたもんだいチュ

○長崎の「風あげ」については渡辺庫輔先生の「長崎ハタ考」(昭和34年・長崎県民芸協会発刊)を読まれるとよい。

○長崎ぶらぶら節には今一ツ次の「ハタ喧嘩」の歌詞がある。
紺屋町の橋の上で子供のハタ喧嘩 世話町が五六町ばかりで三日もぶらぶら…

この時の「子供のハタ喧嘩」は幕末の頃より長崎の町で大いに流行った「セーランエ」という子供達の小旗争の事をうたった街うたであると言われる。

○三月より本会の新年度各講座を開始するので御自由に御参加下さい。

一長崎学を学ぶ講座 毎週月曜日午前十時半より正午、講師は毎回不同(資料代二〇〇円)

一古文書を読む会 毎月第一・第三火曜日。午前十時半より正午(指導 川原清、米田輝臣、久保美洋子女史の各氏を中心)

一水曜懇話会 毎週水曜日午後一時半より三時(江口相談役、吉田幸男、野口嘉弘の各氏を中心)

一歴史茶話会 毎月第二、第四金曜日午後二時より三時(脇山壽子女史、太田靖彦相談役、大東良平の各氏を中心)

○石田孝氏来訪あり。「西郷隆盛は長崎の街に何回来られたか」という事について「長崎鹿児島県人会」で各種資料を整備し発表するので…と長崎と西郷氏の関わりを色々と教えて下さった。

○今月ご寄贈いただいた書籍

一、橋本剛氏(長崎市議)より「大樹22号」(大樹総研刊)本誌は強い日本を志す外交政策、観光等の事につき多くの論考が集められ、大いに参考となるものがありました。

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所二F

